慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	考古學雜誌(第十二卷、十三卷)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1923
Jtitle	史学 Vol.2, No.2 (1923. 2) ,p.121(281)- 123(283)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大正十一年度雜誌主要論文 書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19230200-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

寇研究の權威だけあつて此方面の博洽な識見に對しては敬服せざるを得ない。しかし、浙江市舶司は果して廢されたるか、廢されたとしたならば何時であるかは研究の餘地はまだ〳〵あると思ふ。

（宮島貞亮）

考古學雜誌（第十二卷、十三卷）

本會の同人より大正十一年中の考古學雜誌並に歷史地理の概要の摘錄を依賴せられたが、餘暇の無いため再び通讀することが出來ぬが、たゞ今記憶に殘つて居る處を少しく記述し以て責任を免れたいと思ふ。

さて本年「考古學雜誌」に於て衆目を惹いたものは魏志の倭人傳に記す耶馬臺國の位置に付きての論戰であらう。それ故次に諸氏の高說の大要を記す事にする。

一月號に坪井博士は「支那古地理志の解釋に就いて」と題して魏志後漢書の東夷傳に付きて論述せられて居るが、魏志につき「唯今日に至り惜いことには肝心かなめの魏略は傳はらず、陳壽は餘計の想像を廻らして二三の杜撰をいたしてる。又原文を節略しながら文辭を修飾したる爲に、文意を曖昧にしたり、甚しきは誤解したり、重要なる件を除きて却りて輕微なる項を殘したりいたしたる處がありまする。」又後漢書に付きては「其倭傳には、編者が魏志の記述以外に新しく得ましたる史料は纔に光武中元二年、安帝永初元年の二項しかありませぬ。其餘は徹頭徹尾に魏志の倭人傳を妄刪し亂節しまして、おまけに沙汰の限の杜撰を敢てします。」といはれ、後漢時代の一里は我が十里に相當するのであるが、魏志倭人傳の距離並に方向は信用すべきものでなく、又同志中の最後の奴國は原本に某奴國とあつたのが、後に奴字の上の一字を脫落し遂に同志に轉載せられたのであるまいかと疑はれ、後漢書に於ては范曄が兩奴國を混同して奇妙なる註を付して居る。又博士は陳壽の文を次の樣に校訂せられた、即ち東南陸行五百里到伊都國（五の字衍）、東行至不彌國（東の上に又字を脫す）、次有奴國（奴の上に脫字あらむ）、女王境界（境の上に國字を脫す）

最後に耶馬臺の位置について、「投馬や邪馬臺も玉名と山門との二郡に其名を傳へたるかと思ひますが、二郡の位置は入りかはりてゐまする。」と云はれ、今の玉名郡玉名は一二里の平野であるが交通灌漑漁撈の各に便利よく且つ自然の城塞であるを以て「我等は玉名の平野を邪馬臺の所在地なりと認めたいのでありまする、著しき古墳の存在し之に關聯いたしまする、」と所謂九州耶馬臺說を主張せられて居られるのである。これ傾聽に價する說と思はる。

又同月號に博物館の高橋健自氏は「考古學上より觀たる耶馬臺國」と題して考古學的考察によりて本問題を解決せむとして、當時の最高文化しかも前漢は暫く措き交通により後漢乃至魏初の影響を最著しく受けた文化を徵すべき考古學的資料は畿內と九州と何れに多く認められるか、それが判明すれば本問題は解決するものであらうと述べ、考古學の對象たる古墳及び其の遺物に就いて論ぜられ、古墳中雄大なる前方後圓形が日本獨特の型式を以て畿內ことに大和地方に發生し、應神仁德兩朝が其の發達の絕頂に

て、それが大和を中心として關東九州の東西に傳播し、其の內部に藏せられたる石棺に徵して支那文化の流傳せしを告げ、其の分布より推考して當時畿內地方の支那文化を受け入たる事の到底九州中部の及ぶところにあらざるを論じ、古墳發見の支那鏡及び其の模造鏡によつて漢魏時代に屬すべき優秀なるものが、近畿內地方に發見せられ、これに反して九州地方には甚だ稀薄にして到底これに及ばざる事、或は又銅鐸分布の中心點も亦畿內にして、これに因りて其の文化の成立期を支那前漢より下るべからざるを究められ、以て耶馬臺の大和なるべきを推斷せられたのである。これ耶馬臺大和說の有力なるものゝ一つである。

又三月五月、八月の三號に渡つて土俗學者たる中山太郎氏は「魏志倭人傳の土俗學的考察」と題して其の土俗學の方面より倭人傳を研究せられ、種々の例證を擧げて論述せられ最後の結論に「如上の土俗は決して九州地方にのみ限られたものでなくして、我國に廣く行はれたものであることが看取される。否寧ろ九州に稀薄にして近畿地方に濃厚であると云ひ得るのである。從つて耶馬臺國の所在は土俗學的には九州よりは近畿と云ふ方が、穩當であると信じてゐる。」と耶馬臺近畿說を論述せられて居る。

四月、五月、六月、七月、八月の五月に渡りて山田孝雄氏は「狗奴國考」と題して、從來最も闇晦なりし狗奴國を題目として、從來多くの史家の論ずるが如き誤字誤算等の說を立てゝ之に臨む事を排斥し、記述にあらはれたる文意により忠實に論を立てられて居るのである。同氏の說は坪井博士等の說とは餘程相違する處ありて參考となるところ亦少く無い。同氏は投馬國邪馬臺國は本州內に求むべきものであるとせられ、投馬國は恐らく但馬國であると論述せられ、次にこれより水行二十日にして達しうべきは即敦賀にして、これより陸行して一月にて、達しうべき耶馬臺國は必らず今の大和國であると論斷せられて居り、最後に本論の眼目たる狗奴國は蓋し毛野國にして東國文化の中心地なりとせられて居る。要するに同氏の說は耶馬臺大和國である。同說は高橋氏の考古學上の研究と共に大和說の有力なるものである。

次に七月號に三宅米吉博士は「耶馬臺國について」と題して、耶馬臺大和說を立てられて居らるゝが、同說は前記高橋氏の說並に山田氏の說と大同小異である。

又同月號に耶馬臺國九州說の旗頭たる白鳥博士は「耶馬臺國について」と題してほゞ舊說を繰返されたが、「自分はかつて當時の交通路を唐津以西に置いたのは間違で、唐津に來たものであると思ふに至つた。夫故唐津は大陸の交通の入口で、あの口から大陸文化が入りこんで來たものと思ふ。これは前說が間違つてゐたから取り消す。」と云はれ、「耶馬臺國が九州內にありとする自分の考は倭人傳にある南北對立の關係から見て最早動かぬものと思ふてゐる。即ち北部は女王國、南部は男王國、兩國が相和せずして攻擊する狀を女王國の使者が帶方郡に至つて告げて援助を求めた。即ち武力の點では南の方が强かつたのである。かゝる形勢をなし得るには、九州が適當である。」と論ぜられ、狗奴國は熊襲で、其の官に「有狗古智卑狗」とあるは菊池彥と見るべきであらうと思ふと云はれ、又「とも角政治上の區域と經濟上の區域とは異り、政治上では相攻め合つてゐても、經濟上の交通を止めることは出來

ぬ。夫故大和に大勢力がある。そして支那の遺物が澤山發見されたとしても、是を以て直ちに耶馬臺は大和であるといふ結論にはならない。耶馬臺の地點は適確にはわからぬ。もし强ひて求めるならば、肥後ならばその北部筑後ならば南部であらうと思ふ。」と論ぜられて居る。

以上記述せる處は本年中に於ける耶馬臺國の位置に關する諸說の概要に過ぎないが、同說を大別する時は大和說九州說の二說であるが、大和說は大和の何處なるかを指適せず、九州說も亦其位置不明である。然し兩說共に對陣の形勢で何れとも勝敗は決せぬが、猶本問題は研究を重ねられ益〻接戰せらるゝ事と思はる。

次に右の外自分の一讀して參考となりたるものゝ一二を擧げれば、和鏡聚英正續等の編ある、廣瀨都巽氏の「和鏡に就て」(二月三月、五月、六月)と題して氏の多年の研究の結果和鏡の形式等よりこれを種々分類して說明を加へられ、又「紀年鏡に就きて」と題して(八月、十月、十二月)其鏡面の刻銘墨書或は伴出の紀年の銘文ある經筒寫經等を基礎として其の鑄作年代を研究せられたるものにして、共に參考となる處少くない。

又高橋健自氏の「銅鉾銅劍考」(九月、十月、十一月、十二月)は前回の續篇にして其の發見地の年々歲々增加し行くを書き集めたるものであり、猶朝鮮出土のもの並に其伴出遺物等につきて記述せられており有益の記事である。

猶後藤守一氏の對馬雜見錄(八月、十一月)並に「東北地方に於ける奈良時代の一墳墓」(十二月)は面白く一讀した。

要するに本誌は同學研究機關雜誌としては唯一のもので每號有益の研究或は報告等を記載し且つ鮮明なる圖版を加へられ我が「史學」も大いに同誌に學ぶべきであると思ふ。

猶序に附記して置くが同會は本年四月二三兩日の休日を利用して鹿島神宮に研究旅行をなし、一行二十餘名盛なるものであつた又五月二十一日には第二十七回總會と共に美術學校に於て會員家藏展覽會を開催し、會員御自慢の珍品が集つた。又同會よりは考古圖集等を引き續き刊行せられ學界に貢獻する處記す迄も無い。

歷史地理（三十九卷、四十卷）

曾て「史學雜誌」と肩を並べたる「歷史地理」は前者の專門的なるに反して後者の通俗的なる爲め共に相下らず學界研究雜誌として賞讃せられたものであつた。

然るに最近五六年來史學の研究急に盛となり、これが著述出版年々歲々增加するに至り、大正五年一月より京大に於て東大の「史學雜誌」に對して「史林」季刊せられしを振出として、相次いで「歷史地理」に對して「歷史と地理」の刊行を見るに至り、猶其後國史講習會よりは「中央史壇」を刊行する等、其の研究雜誌雨後の竹子の如く學會にあらはるゝに至つた事は讀者一般の承知せらるゝ事と思ふ。（我が「史學」も昨年學界に生れ、此等諸誌のお仲間入りをした譯である。）

さて數十年來の歷史を有する「歷史地理」は是等新興の諸雜誌に壓せられたるか、この二三年間一向振はず恰も「冬眠」の期にあるが如く思はれ、多年會員たる自分は常にふがいなく感ぜられるが